

「私事語り」の開始からみる主題を表す「私は」と「私φ」の 使い分けに関する考察

金 青 華*

The use of “Watashi ha” and “Watashi φ” in the Opening Sequences of Conversations about Personal Matters

JIN Qinghua

Abstract

In this paper, I will analyze the use of the first person pronoun “Watashi ha” and “Watashi φ” in conversations about “personal matters”.

With reference to Kushida’s (2006) procedures in the opening of “personal matters talk”, in this paper I will present the following six ways of openings: a) talking about a new “personal matter” when inserting reason description/explanation, b) talking about a common experience as an example, c) emphasizing a contrasting experience as an example, d) creating an opportunity to talk about one’s own experience, e) talking about a “personal matter” as a topic change, f) talking about a “personal matter” as a response. Moreover, I will analyze the frequency of “Watashi ha” and “Watashi φ” in each of the openings.

The findings showed that “Watashi φ” can be used in most of the cases. However, in the case of c) emphasizing a contrasting experience as an example and f) talking about a “personal matter” as a response, the use of “Watashi ha” is preferred.

Keywords: Watashi ha, Watashi φ, personal matters, subject, interaction

1. はじめに

主題を表す「私」は省略されることが一般的であるが、無助詞の「私φ」¹という形式は、日本語の会話において頻繁にあらわれる。それは書き言葉と異なって、話し言葉では敢えて話し手自身を示す場合「私φ」を用いることにより、主題を表す「私は」²の対比感が回避できるからである(黒崎 2003)。

日本語母語話者は会話の中で、「私は」と「私φ」の使い分けを自然に行っていると考えられる。しかし、日本語学習者は、「私は」と「私φ」のニュアンスの違いが理解できず、「私は」を多用して、相手に「自分を強く押し出す」印象を与えることがある。また、上級学習者は意識的に一人称代名詞の使用を回避して(Elsherbeny 2010)、語り手自身に関して突然話し始める印象を与えることもある。したがって、日本語学習者が自分のことを語る場合、「私は」と「私φ」を適切に用いて自分の発話意図を正確に伝え、相手に違和感を与えないようにするためには、日本語教育で主題を表す「私は」と「私φ」の使い分けに注目して取り上げる必要がある。

これまで「私は」と「私φ」に焦点を当てた研究が少なく、無助詞文の研究における例文として取り上げられているものが多い。その多くの研究は、主題機能、情報の新旧および対話の知識管理という文法的な観点から、

キーワード：「私は」, 「私φ」, 私事語り, 主題, やり取り

*平成24年度生 比較社会文化学専攻

「私は」と「私ゆ」の機能、出現条件、表現効果を考察している(ハドソン・近藤 2001; 黒崎 2007)。例えば、黒崎(2007)は、語り手³に関することが聞き手に予想や期待されている場合には「私は」が用いられ、そうでない場合には「私ゆ」が用いられると述べている。しかし、「聞き手が予想や期待しているかどうか」という解釈は抽象的で、日本語学習者にとって理解しがたく、どのような先行発話が聞き手の予想や期待を表しているのかが疑問になる。すなわち、実際のコミュニケーションの場面で会話参加者はどのような先行発話を前提として、「私は」と「私ゆ」を使い分けるのか、といった発話連鎖での使い分けを学習者に提示する必要がある。さらに、庵(2006, 2009)が主張したように、「日本語学的な体系重視の考え」よりは、「実用的観点」から、学習者が使いこなせるような使い分けを日本語教育に導入する必要がある。

そこで、本研究では「私は」と「私ゆ」が多く使われる場面として「私事語り(自分の経験を語る発話行為(串田 2006))」を取り上げる。そして、実際のデータを通して、日本語母語話者が「私は」と「私ゆ」をどのように使い分けているのかを明らかにし、それに基づいて実際のコミュニケーションの場面で活用できる「私は」と「私ゆ」の使い分けを提示する。

2. 先行研究

2.1 「私は」と「私ゆ」に関する先行研究

無助詞文に関する先行研究は、無助詞文の出現条件、機能、表現効果などについて議論されているものが多い。まず、無助詞の出現条件に関しては、大谷(1995b)、黒崎(2007)が挙げられる。また、機能に関するものには、長谷川(1993)と黒崎(2007)が、表現効果に関しては、楠本(2002)、ハドソン他(2005)、黒崎(2007)、浅野(2012)がある。これらの先行研究から「私は」と「私ゆ」の使い分けをまとめると、まず、出現条件において、語り手に関することが聞き手に予想や期待されている場合には「私は」が用いられ、そうでない場合には「私ゆ」が用いられることが指摘されている。また、機能に関しては「私は」は対照的な意味合いが生じるのに対し、「私ゆ」は対比性を避け、中立的に語り手を取り出すという「取り出し」機能を果たしていることが述べられている(黒崎 2003; 寺崎 2013)。さらに、表現効果において、「私は」は、聞き手に語り手と対比されている対象にも注意を向かせるのに対し、「私ゆ」は、対比の意味合いがないため、語り手だけに注目させると言われている(浅津 2012)。また、「私ゆ」は、語り手が感じたまま直接に伝えるように響く類が多く(ハドソン他 2005)、「私は」は、より客観的、説明的、分析的に聞こえると述べられている(楠本 2002; ハドソン他 2005)。

以上の先行研究は、いずれも対話における知識管理と助詞の有無による主題性の違いなどの文法的な観点から考察されたものである。しかしながら、学習者にとってはどのような場合に聞き手が語り手のことを期待しているのかがイメージしにくい。また、助詞の有無により、発話意図がどの程度反映されているのかを判断するのも難しい。

そこで、本研究では、学習者にイメージしやすく提示するため、既存の文法的な観点による使い分けではなく、「私事語り」という発話行為の開始部分に絞り、「私は」と「私ゆ」が用いられている場面の違いを明らかにする。以下、会話参加者の相互行為の中で「私事語り」がどのように開始されるのかに関する先行研究について述べる。

2.2 串田(2006)による「私事語り」の開始方法

串田(2006)は、「私事語り」はお互いに自分の経験を語ることにより、お互いの経験を分かち合い、相手との間に共通の経験があるかどうかを探索することを目的としていると指摘している。そのため、会話の適切な機会、相手が自分の経験を、耳を傾けるに値するものとして報告する必要があると述べ、「機会づけられた(occasioned)形」で開始される「私事語り」として次の四つの方法を挙げている。

- a) 理由説明への埋め込みとして自分の経験を報告する方法
- b) もう一つの事例として自分の共通経験を報告する方法
- c) もう一つの事例として差異の経験を主張する方法
- d) 相手の私事について質問することにより、自ら自分の経験を語る機会を作り出して語る方法

以上の四つの開始方法には、次の二つの特徴がある。一つは、自分の「私事」を自発的に語るということである。もう一つは、「私事」を語る機会が用意されているということである。すなわち、a)「理由説明への埋め込み」は、ある評価を行った後に、その評価に対して説明する責任が付随されるという観点から機会が用意されている(平本 2011)。そして、b)共通経験の報告、c)差異の経験の主張、d)自ら自分の経験を語る機会を作り出して語る方法は、共通経験を探るために、一人の「私事」を先行事例として、もう一人が比較可能な「私事」を語る必要があるという観点から機会が用意されている。

しかし、串田の提示する三つの方法は、「自発的」と「機会づけられた形」という特徴に焦点を当てて分析したもので、「私事語り」の全体を捉えていない。

3. 研究目的と課題

本研究では、「私事語り」という発話場面を取り上げ、日本語母語話者による会話データから「私は」と「私φ」の使用実態を分析し、学習者が実際の会話場面で使いこなせる「私は」と「私φ」の使い分けに関して示唆を得ることとする。そこで、以下のように課題を立てる。

課題1:「私事語り」の開始において、「私は」の使用頻度が高い場面にはどのような開始方法があるのか。

課題2:「私事語り」の開始において、「私φ」の使用頻度が高い場面にはどのような開始方法があるのか。

4. 研究方法

4.1 分析データ

本研究では、「BTSJによる日本語話し言葉コーパス(トランスクリプト・音声)2011年版」(宇佐美2011)の中で、学年差が1年以内の20代女性の大学生・大学院生2名(日本語母語話者)による初対面会話12組を抽出した。総会話時間は175分41秒、総発話文は3684発話文である。ただし、同一参加者が異なる参加者を相手とする場合もあり、会話参加者は16名である。

4.2 分析対象

まず、本研究では主題を表す「私は」と「私φ」を分析対象とするため、後ろに「なんか」、「なんて」などの副助詞や「ね」、「さ」などの間投助詞が付いているものは対象外とした。

次に、「私は」と「私φ」が主題として用いられているのかを判断するために、苅宿(2011)が提示した分類を参考にした。苅宿(2011)は、1)主節相当グループに属し、2)文頭に出現する3)語り手と聞き手との共有知識による「具体的なもの」が、発話の主題として提示されると述べている。そして、主節相当グループに関しては、①主節文、②「後続文なし」の従属節、③「後続文あり」の従属節の中で「～ガ、～カラ、ケレド(ケド)、～シ、～テ」の接続助詞を含む従属節に分類している⁴。

4.3 分析枠組み

本研究の分析データに現れた「私は」と「私φ」の使用場面には、第2章の2節で取り上げた串田(2006)の分類に当てはまらないものもみられた。すなわち、e)話題の転換として「私事」を語る方法と、f)応答表現として「私事」を語る方法である。e)話題の転換として「私事」を語る方法は、相手が注意を向けている話題とは異なる新しい話題を導入するため、相手が耳を傾けるに値するものとして語る機会が与えられていない場合に当たる。そして、f)応答表現として「私事」を語る方法は、相手から質問を受けて答えるため、自発的に語るのではなく、強制的に語る特徴がある。このように新たな開始方法が出現する理由として、串田(2006)の提示した開始方法(a-d)は「自発的」と「機会づけられた形」という特徴があるのに対して、本研究のデータに出現した開始方法は「強制的」と「機会付けられていない」という特徴がある点が挙げられる。そして、串田(2006)が友人関係の会話を分析したものであるのに対して、本研究のデータが初対面会話である点も挙げられる。

そこで、本研究では、串田(2006)が挙げた「私事語り」の開始方法を参考にし、分析データに現れた二つの開始方法を加え(eとf)、「私事語り」の開始方法を表1で示したように、6種に分ける(表1を参照)。

表1 「私事語り」の開始方法(串田 2006に基づき、筆者が加筆)

特徴	「私事語り」の開始方法
自発的/機会あり	a)理由説明への埋め込みとして新しい「私事」を語る方法
	b)もう一つの事例として共通経験を語る方法
	c)もう一つの事例として差異の経験を主張する方法
	d)自ら自分の経験を語る機会を作り出して語る方法
自発的/機会なし	e)話題の転換として「私事」を語る方法
強制的/機会あり	f)応答表現として「私事」を語る方法

以下、先行研究を踏まえて、それぞれの開始方法を定義し、会話例⁵を用いて「私は」と「私φ」の使用場面を説明する。

a) 理由説明への埋め込みとして新しい「私事」を語る方法

理由説明への埋め込みとは、先行発話で述べられたことへ評価・コメントを行うとき、その評価・コメントへの理由説明の中に埋め込む形で自分の「私事」を語ることである。次の会話(1)では、JBF01が「なんかね、近いんだ」と、JSF02が旅行した韓国に対して評価をし、その理由説明として自分の出身地を報告している(発話192)。

- (1) 190 JBF01 じゃあ韓国でもあちこち回ったんですね。
 191 JSF02 うん、そうですね。
 →192 JBF01 へえー、なんかね、近いんだ。私φ鳥取出身なんですよ。

b) もう一つの事例として共通経験を語る方法

共通経験を語る方法とは、先行するやりとりにおいて言及された出来事に対するもうひとつの事例として自分の共通経験を報告することである。次の会話(2)では、J2が登校するとき坂が多かったため、3段変速の自転車に換えたと報告している(発話306)。その後、J3は6段変速の自転車に乗っていたこと(発話308)を、相手の事例に対するもうひとつの事例として報告することにより、「変速自転車をもっている」という共通経験を語っている。

- (2) →306 J2 でもまた買っちゃった、3段、<変速>{<}<。

 307 J3 <変速>{>}<。

 →308 J3 私φ、6段変速だったの。

c) もう一つの事例として差異の経験を主張する方法

差異の経験の主張とは、先行する事例と共通の経験がない場合、差異の主張として自分のことを語ることである。次の会話(3)では、UF05が「3年生になると忙しくなった」と自分のことを語る(発話58)。それに対して、UF06が聞き手と第三者とは異なり、「2年生のほうが大変だった」と(発話60、発話62)、3年生になった今はそれほど忙しくないという経験の差異を語っている。

- (3) →58 UF05 やっぱ3年生とかなると、忙しくなりま…したよね。
 59 UF06 あーそうですか。
 →60 UF06 私は一(はい)2年生のほうがどっちかっていうと
 61 UF05 忙しくかったですか?<}<。

 62 UF06 <大変だった>{>}(あー)、感じ。

d) 自ら自分の経験を語る機会を作り出して語る方法

この方法は、「私事」を語る適切な機会が準備されていない場合、相手の「私事」について質問することにより、相手に事例を語らせ、自分の事例を語る機会を作り出して語ることである。会話(4)では、JBF01がいきなり自分の「学年」を語らず、まず、「今、修士の？」と質問して、相手に語らせた後に(発話10)、自分は「修士2年目」とであると報告している(発話14)。

- (4) →10 JBF01 今、修士の…?
 11 JSF02 1年目です。
 12 JBF01 1年目ですか。
 13 JSF02 はい。
 →14 JBF01 私 ϕ 2年目です。

e) 話題の転換として「私事」を語る方法

この方法は、先行話題が終わった場合、話題が途切れないように、また相手に唐突なものとして聞かれないように、先行発話のある要素と関係づけて「私事」を語り始めることである。次の会話(5)では、UF15とUF16の実家が町に遠いため、出るのが大変で、「車が大事である」と共通の認識を形成している(発話324-327)。この話題はUF16の賛成により終わっている(発話327)。その後、UF15は、「車」と「運転」を関連付け、「運転ができない」という「私事」を語り、「運転」という新しい話題を提供している(発話328)。

- (5) 324 UF15 だって、なんか遠いし、疲れるし、お金かかるしとか思っ<笑いながら>。
 325 UF16 ですよねー<笑いながら>。
 →326 UF15 やっぱり、ああいうとこだと、車が大事ですよー。
 327 UF16 あー、ですよー、<かなり>{<}<。</math>
 →328 UF15 <私 ϕ >{>}運転できないんでー。

f) 応答表現として「私事」を語る方法

この方法は、質問を受け、応答として「私事」を語る方法である。Svenneving(1999)は、「面識のない人と出会うときの典型的な質問とその後の返答の一連の発話」を「自己呈示的連鎖」と定義し、語り手が質問に対し、協調的に、拡張的に返答すれば、新しい話題の開始が行われると指摘している。会話(6)は、NS02の質問をうけ、JBF04が「私は」を用いて「学年」に関する個人情報を伝える発話である。この会話では、「えーと」というフィラーや、「[実験者姓]さんのクラスメートです」という補足事例が用いられており、語り手が相手の質問に対してより詳しく説明している。

- (6) 4 NS02 《少し間》え、なん、何年生くですか?>{<}<軽く笑いながら>。
 →5 JBF04 <あー>{>}私はえっとー、「実験者姓」さんのクラスメートなんですけどー(はい)、修士の2年です。

4.4 分析手順

まず、苜宿(2011)により、文字化資料から「私事語り」の開始部分に用いられていて、主節相当グループに属し、文頭にある「私は」と「私 ϕ 」を抽出した。次に、4.3で示した「私事語り」の開始方法に従って、「私は」と「私 ϕ 」の使用傾向を比較する。

「私は」と「私 ϕ 」の主題性および「私事語り」の使用方法の判定に関しては、筆者以外の日本語母語話者1名にも依頼し、協議のうえ、分類を行った。

5. 結果

主題を表す「私は」と「私φ」に対して、4.3で示した「私事語り」の開始方法の使用傾向を量的に分析した結果、各方法において使用頻度に違いが見られた⁶(表2を参照)。

表2 「私事語り」における「私は」と「私φ」の使用回数(%)

「私事語り」の開始方法	「私は」	「私φ」	計
a) 理由説明への埋め込み	2 (9.5%)	19 (90.5%)	21 (100.0%)
b) もう一つの事例 (共通経験)	0 (0.0%)	9 (100.0%)	9 (100.0%)
c) もう一つの事例 (差異の経験)	25 (75.8%)	8 (24.2%)	33 (100.0%)
d) 語る機会を作り出して語る方法	1 (16.7%)	5 (83.3%)	6 (100.0%)
e) 話題の転換として語る方法	0 (0.0%)	5 (100.0%)	5 (100.0%)
f) 応答表現として語る方法	10 (90.9%)	1 (9.1%)	11 (100.0%)
総計	38 (40.0%)	57 (60.0%)	95 (100.0%)

5.1 課題1: 「私は」の使用頻度が高い開始方法

表2で分かるように、「私事語り」の開始方法において、「私は」の使用頻度が高い開始方法は、c) もう一つの事例として差異の経験を主張する方法と、f) 応答表現として「私事」を語る方法である。c) の場合には、「私は」が75.8%で「私φ」より3倍強多く用いられている。そして、f) の場合には、一人称代名詞が11回明示されているが、そのうち10回が「私は」である。

5.2 課題2: 「私φ」の使用頻度が高い開始方法

表2で示しているように、「私φ」の使用頻度が高い開始方法は、a) 理由説明への埋め込みとして新しい「私事」を語る方法、b) もう一つの事例として共通経験を語る方法、d) 自ら自分の経験を語る機会を作り出して語る方法、e) 話題の転換として「私事」を語る方法である。その中で、b) とe) の場合には、すべて「私φ」が用いられている。そして、a) とd) の場合においては、「私φ」がそれぞれ90.5%と83.3%で、いずれも「私φ」の方が多く用いられている。

全体的にみると、「私事語り」の開始方法において、「私φ」はすべての開始方法に用いられるのに対して、「私は」は四つの開始方法に用いられている。そして、出現回数の点では、「私φ」が57回で、「私は」が38回ということで、「私φ」と「私は」が3:2の比率で用いられている。これは、話し言葉では無助詞の「私φ」が用いられやすいという先行研究の結果と一致している。

これらの結果から、ほとんどの場面には「私φ」が通用できることがわかる。ただし、差異の経験を語る場合と、応答表現として語る場合には「私は」のほうが自然であることがわかる。

6. 考察とまとめ

以下では、差異の経験と応答として語る場面において「私は」が自然に感じるのはなぜなのか、「私φ」がほとんどの場面に用いられるのはなぜなのかに関して考察する。

6.1 「私は」が選好される開始方法

第5章で述べたように、「私は」が選好される「私事語り」の開始方法にはc) 差異の経験を主張する方法と、f) 応答表現として「私事」を語る方法がある。

まず、c) について考察する。この場合、同一の話題において、「あなた(第三者)の場合はそうである」が、「私の場合はこうである」というように、先行する事例の主体と語り手自身は「対比」の関係になる。そのため、対比の意味が生じる「私は」を用いることにより、先行する事例と共通の事例が見つからないこと、先行する事

例と異なる事例であることを強く主張することができる。一方、「私φ」を用いた場合、差異の意味が弱くなる。会話(7)の発話27で、UF16は「その反対で」という表現を用いて、相手が童顔であるのに対し、自分が老顔であることを強く主張している。この場合、「私φ」を用いても、不自然ではないが、「あなたとは異なる」という語り手の気持ちは、やや弱く感じられる。そのため、この場合は対比の意味が強い「私は」が選好される。

- (7) 25 UF16 あ、でも、<確かに若く見えるような…>{<}。
 26 UF15 <ちょっと、ショックなん>{>}ですけど…<笑いながら>。
 →27 UF16 あ、私はその反対で、すごくこう(あ)、老けて見られる<から>{<}

このように、差異の経験を語る際、対比の意味合いが強い場合は「私は」が選好され、対比の意味を回避する場合は「私φ」が選好される。c) 差異の経験を主張する方法において「私φ」が用いられている発話をみると、8回の使用例のうち、7回が聞き手の事例に対する差異の経験を語る場合に用いられている。すなわち、差異の経験の相手が聞き手の場合、経験の差異性を弱めるために、対比の意味合いを感じない「私φ」が用いられたということである。

次に、f) 応答表現として「私事」を語る方法について考察する。本研究で「質問—応答」という発話連鎖として語られた「私事」はほとんど出身地、学年、専攻などの基本情報であった。この場合、語り手は聞き手の質問に対しありのまま、客観的に、丁寧に伝えようとする。そのため、会話(6)のように、「説明的」、「分析的」な効果のある「私は」が選好される。

一方、表2で示したように、f) の場合において「私φ」が1回しか用いられていないが、それは語り手の心情が表れる発話であった。その例が会話(8)である。会話(8)では、夏休みの予定に関する質問に対して、UF06はまず「あ」と「ちょうど夏休みに遠出する予定があった」と驚き、続いて、「実は」を用いて、「旅行」ではなく「留学」に行くことと実情を告白している。この場合は、訴えかけるといふ語り手の心情が伴っているため、「私φ」が用いられている。

- (8) 104 UF05 今年の夏ってどっか旅行行きますか
 →105 UF06 あ、私φ、あの、来週の月曜日から実は留学に行くことになってくてー
 >{<}<笑い>。

6.2 「私φ」が選好される開始方法

第5章の表2で示したとおり、「私φ」はほとんどの場合に用いられるが、「私は」より特に使用頻度が高い開始方法には、a) 理由説明への埋め込みとして新しい「私事」を語る方法、b) もう一つの事例として共通経験を語る方法、d) 自ら自分の経験を語る機会を作り出して語る方法、e) 話題の転換として「私事」を語る方法があった。この四つの場面に「私φ」が選好される理由には、次の二つがある。その一つは、a) とe) のように「私事」が新しい話題として語られることである。もう一つは、b) とd) のように、「私事」が先行する事例と対比的な関係が生じにくいということである。

まず、新しい話題として語られる場面について考察する。会話(9)では会話参加者が近所のスーパーが高いということ話を話合っている。J3は、J2の意見に同意した後、そのスーパーのアンケートを書いたら係りの人から電話がかかって来たという新しい「私事」を語っている(発話341)。すなわち、話題が「近所のスーパー」から「J3」に変わっていく。そのため、語り手の「私事」が相手に唐突に響かないように、一人称代名詞の明示が要求される。しかも、先行発話に比較可能な事例がないため、対比の意味合いが生じない「私φ」が選好される。もし、この場合に「私は」が用いられるとすれば、J3がJ2の意見を反対するのか、あるいは、J2もアンケートを書いたが、ポイントをもらったというJ3とは異なる経験が語られるであろう。

(9) 340 J2 全然安くなってない、あそこは。

→341 J3 うん、私φ、なんかー、お客さまの(うん)、声とかいうのに(うん)、高い、品物が高いとか色々書いたら(うん)、この前電話掛かってきて、「スーパー名」の人からく笑い。

次に、対比的な関係が生じにくい場面について考察する。b) の場合には同じ話題において、「あなたの場合がそうであれば」、「私の場合も似ていることがある」というように、先行する事例と共通な経験が語られる。そのため、対比の意味合いが生じる「私は」は不自然となる。

そして、d) の場合は、自分の語りたい「私事」を語るために、質問表現を用いて聞き手に語らせ、自分の「私事」を「もう一つの事例」として受け入れさせようとする事なので、先行事例の主体は聞き手である。この場合、聞き手との差異を避けるためには、「私φ」が選好される。例えば、会話(10)(会話4を再掲)は、先輩と後輩という上下関係が生まれやすい話題である。JBF01は相手の学年を聞いた後、「私φ」を用いて自分の学年を語る事により、自分が先輩であるという上からの視線を回避している(発話14)。もし、「私は2年目です」と言う事すれば、相手と自分の上下関係をはっきりしようとするJBF01の気持ちが現れるだろう。したがって、d) の場合は、聞き手と対比的な関係が生じやすいため、「私φ」が選好される。

- (10) 10 JBF01 今、修士の…?
11 JSF02 1年目です。
12 JBF01 1年目ですか。
13 JSF02 はい。
→14 JBF01 私φ 2年目です。

6.3 まとめ

本研究では、主題を表す一人称代名詞「私は」と「私φ」を研究対象とし、「私事語り」の六つの開始方法を取り上げ、「私は」と「私φ」が用いられる場面の違いを分析した。その結果、対比性が回避できる「私φ」はほとんどの場面に用いられることがわかった。ただし、差異の経験を主張する方法では、先行する発話の主体と対比的な関係を生じるため、「私は」が選好され、応答表現として語る方法では、客観的に、説明的に自分のことを伝えるため、「私は」が選好されるということがわかった。

7. 日本語教育への示唆と今後の課題

日本語教育の現場において、本研究のはじめに述べたように、学習者の一人称代名詞の不自然な使用がよくみられる。その原因として、初級段階から「私は～」のような文が導入されている教科書やその教え方があげられる(楠本 2010)。また、「日本語において一人称代名詞は省略されるのが一般的であるため、明示しないほうがいい」という教え方も挙げられる。しかし、実際の会話データをみると、「私は」よりは「私φ」のほうが多く用いられるし、すべての一人称代名詞が省略されているわけではない。

庵(2009)は、文法項目は日本語学的な体系よりも実際の使用状況を重視して導入するべきだと述べている。したがって、日本語教育では、実際の自然会話で「私φ」が「私は」より多く使われていることから、「私φ」を積極的に導入する必要がある。また、「私は」と「私φ」の使い分けにおいて、主題機能や情報の新旧などの文法的な観点ではなく、学習者が実際のコミュニケーションの場面で使いこなせるように指導すべきである。すなわち、会話参加者の相互行為の中における「私事語り」の開始方法を提示し、その上でどのように使い分けしているのかを指導することで、学習者はさらにイメージしやすくなると考えられる。

本研究では、主題を表す一人称代名詞に焦点を当て、主語を表す「私が」は取り上げていない。しかし、一人称代名詞の使用というと、「私φ」、「私は」、「私が」が挙げられる。例えば、会議で係りを決める場合、「私φ/私は/私がやります」という三つの表現が可能で、それぞれ使用場面と語り手の心情によって使い分けしている(この点については、黒崎(2007)が詳細に述べている)。今後、「私φ」、「私は」、「私が」及び「省略」において、「私

事語り」という会話分析の観点から考察を行い、その共通点と相違点を明らかにしたい。また、今回は年齢の近い初対面同士の会話を分析したが、今後は社会的地位の違う対話者の初対面会話に関しても分析したい。

註

1. 本研究では、無助詞を「 ϕ 」で表記する。
2. 寺崎(2013)は、格助詞「が」は、主語になる名詞句を述語に密接に結合させ、主述関係を構成する統語的機能を果たすため、文に主題がなく、文全体が「新情報」として表されているのに対し、助詞「は」と主題性を持つ無助詞は、名詞句を文の他の要素から主題として分離させ、後述の「説明」(新情報)と対峙させる機能を果たすため、主題の表現手段であると指摘している。
3. 本研究では、「私事語り」の観点から考察していくため、「私事」を語る話し手を「語り手」と表記する。
4. 苜宿(2011)は、②は一文相当の独立性を持ち、③は従属節の主節への従属度が低いため主節相当グループに分類した。
5. 本研究で使用された会話例は、宇佐美監修(2011)「BTSJによる日本語話し言葉コーパス(トランスクリプト・音声)2011年版」の中で抽出したものである。
6. 本研究のデータは、16人の協力者のうち、一回だけ協力した発話者が12人である。そして、二回協力した発話者が二人、三回協力した発話者が一人、四回協力した発話者が一人である。この結果は、この条件下において得られたものである。

参考文献

1. 浅津嘉之(2012)「「私は」と「私 ϕ 」による発話解釈への影響」『日本語教育論叢』第21号, 1-8
2. 庵 功雄(2006)「教育文法の観点から見た日本語能力試験」土岐哲先生還暦記念論文集編集委員会編『日本語の教育から研究へ』, 61-70, くろしお出版
3. 庵 功雄(2009)「推量の「でしよう」に関する考察：日本語教育文法の視点から」『日本語教育』142, 58-68
4. 大谷博美(1995b)「ハとガと ϕ -ハもガも使えない文」『日本語類語表現の文法(上)』宮島達夫・仁田義雄 くろしお出版
5. 苜宿紀子(2012)「雑談における \forall 各動詞を述語とした無助詞文」『早稲田大学教育・総合科学学術院学術研究』第60号, 137-151
6. 串田秀也(2006)『相互行為秩序と会話分析—「話し手」と「共-成員性」をめぐる参加の組織化』世界思想社出版
7. 楠本徹也(2010)「日本語の対話テキストにおける自称詞・対称詞の主題機能—中国人学習者の日本語による初対面会話からの分析」『東京外国語大学論集』81, 155-166
8. 楠本徹也(2002)「無助詞文における話し手の情意ネットワーク」『日本語教育』115, 21-30
9. 黒崎佐仁子(2003)「無助詞文の分類と段階性」『早稲田大学日本語教育研究』2, 77-93
10. 黒崎佐仁子(2007)「話題提示に見られる無助詞文の条件-ニュース見出しを中心として」『早稲田日本語教育学』1, 67-80
11. 寺崎英樹(2013)「日本語とスペイン語の主題と主語」『日本語・日本学研究』3東京外国語大学国際日本研究センター, 91-107
12. 長谷川ユリ(1993)「話しことばにおける「無助詞」の機能」『日本語教育』80, 158-168
13. ハドソン遠藤陸子・近藤純子(2001)「無助詞の主語・主題」ATJ(日本語・日本文学学会)年次会発表論文
14. ハドソン遠藤陸子・近藤純子・榎原芳美(2005)「無助詞の主題・主語・目的語」『言語学と日本語教育IV』南雅彦くろしお出版, 25-36
15. 平本 毅(2011)「他者を「わかる」やり方にかんする会話分析的研究」『社会学評論』62(2), 152-170
16. Maher Elsherbeny(2010)「日本語の第一人称—選択的第一人称—」『拓殖大学日本語紀要』第20号, 107-118
17. Svenneving, J (1999) *Getting acquainted in conversation: A study of initial interactions*, Amsterdam: John Benjamins Publishing Company